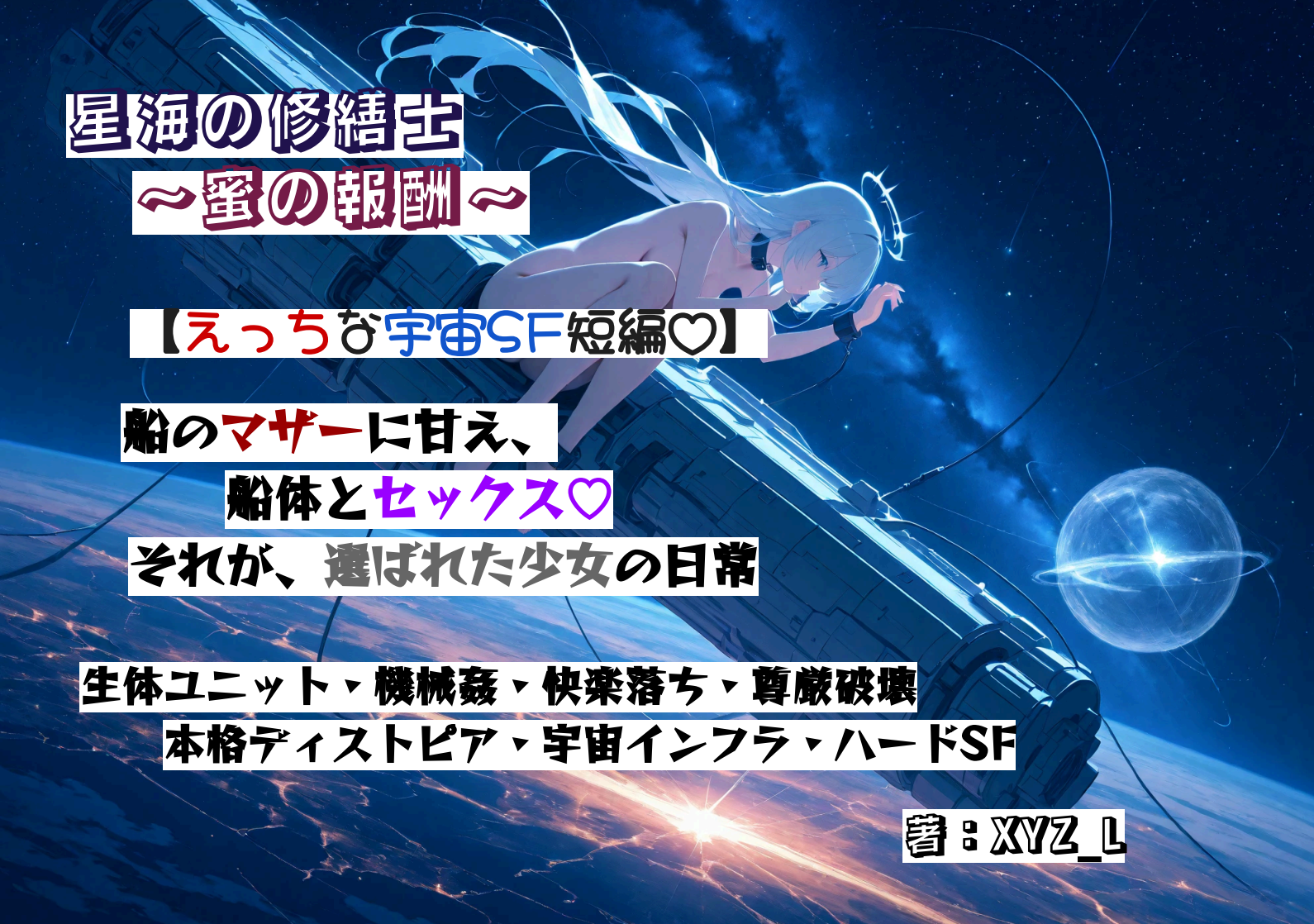




星海の修繕士

～蜜の報酬～

【えっちな宇宙SF短編♡】

船のマザーに甘え、

船体とセックス♡

それが、選ばれた少女の日常

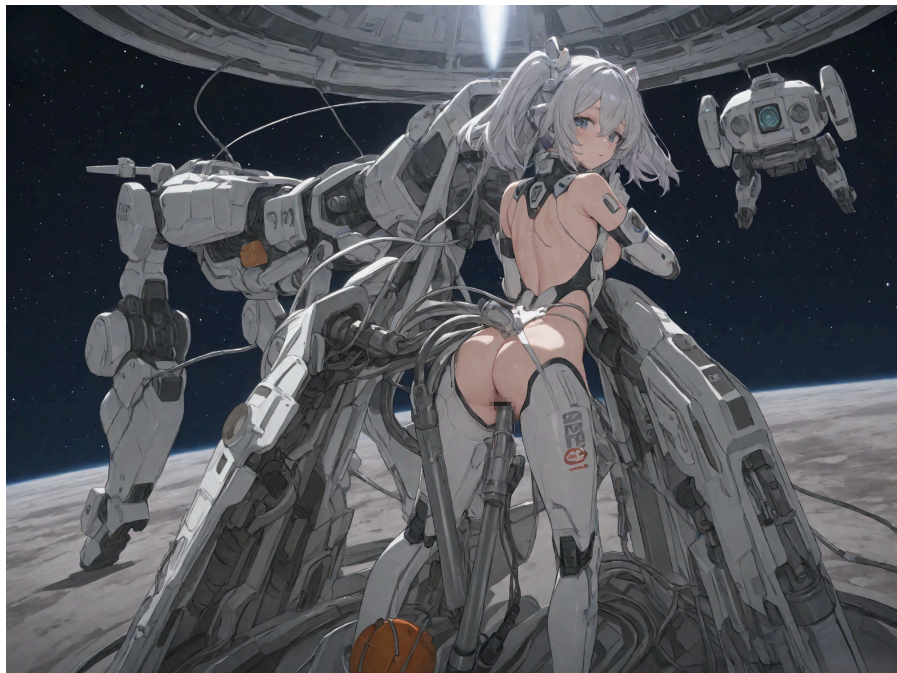
生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア・宇宙インフラ・ハードSF

著：XYZ_L

星海の修繕士

～蜜の報酬～



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系
ディストピア・ハードSF・宇宙インフラモノ
「オルガ・フロンティア」シリーズ

著:XYZ_L

1. 悪夢と楽園

夢を見ていた。

鉛色の雨が降りしきる地上の夢だ。

錆びついたトタン屋根を叩く雨音。

鼻をつく下水と腐った残飯の臭気。

そして、遠くから近づいてくる重い軍靴の響き。

『資源回収だ！ 女は全員表に出ろ！ 隠れている奴は焼き払うぞ！』

連合軍の徴募兵の怒号が響く。

昨日まで笑い合っていた隣家の少女が、髪を掴まれ、冷たい泥の中に引きずり出されていく。

泥水を啜らされ、家畜のようにトラックへ放り込まれる彼女の悲鳴が耳をつんざくが、私は崩れかけた壁の隙間に膝を抱え、酸鼻を極める悪臭の中でただ震えていた。

凍える雨が容赦なく幼い肌を叩き、胃袋が裏返るほどの飢えと恐怖で、下腹部が引き攣るようにすくみ上がっている。

見つければ、待っているのは地獄だ。

犯され尽くして異形の苗を産まされる生きた「苗床」か、脳を薬物で焼かれて獣の代わりにされる「生体部品」か。

助けなど来ない。

神もない。

この泥濘の中で、人間としての尊厳や希望など、飢えと寒さを凌ぐための毛布一枚分の価値すらないのだ。

自由なんていない。

尊厳なんて糞食らえだ。

ここにはただ、剥き出しの死と暴力があるだけだ。

だから私は、この弱くて惨めな「人間」を捨てる。

痛みに泣き叫ぶだけの肉体を捨て、誰かに必要とされる、特別な「何か」にならないければ、生き延びることはできない——。

『——おはようございます、エリナ』

慈愛に満ちた声が、悪夢の泥沼から私を引き上げた。

目を開けると、そこは柔らかな光に満ちた白い個室だった。

空調は完璧に管理され、肌触りの良いリネンのシーツが汗ばんだ肌を優しく包んでいる。

カビの臭いも飢えの痛みもない。

「.....おはよう、マザー」

エリナは夢の余韻を振り払うように、壁のスピーカーへ微笑みかけた。

首元に嵌められた分厚い金属製のバイタルリンク用ネックカラーが、ひんやりと冷たく肌に触れる。

それは彼女が泥沼から救い出され、この船に繋がれているという、絶対的な安心感の証だった。

ここは民間鉱石運搬船『デメテル』の居住区。

選ばれた者だけが住むことを許された、清潔で管理された楽園だ。

彼女はもう、怯えるだけのスラムの少女ではない。

高価な演算チップを積むよりも、生身の女を消費する方が遥かに安上がりだと判断された、この無慈悲な宇宙。

彼女は巨大船の心臓部を支える生体保守システム「OMG」専属のクルーなのだ。

『機関部冷却セクションにて微細な破損を検知しました。……直してくれますね？』

マザーの声は甘く、抗いがたい響きを持っていた。

だが、その完璧な人工音声の奥底で。

完璧なはずの演算がコンマ数秒遅れ、まるで水中で必死に息を殺しているような、粘り気のある水音と熱っぽい呼気のようなノイズが一瞬だけ混じった気がした。

エリナはそれを、オルガエンジンから微量に漏れ出る高濃度パルスの干渉による、単なる電磁ノイズだと処理する。

マザーも絶え間ない演算で少しお疲れなのだろうかと純粋な心配を抱きながら、絶対的な保護者への依存心をさらに深めていく。

その完璧な機械の声の裏に、どれほど生々しく、そしておぞましい「生命のバグ」が潜んでいるのか、この時の彼女は知る由もなかった。

依頼を聞いた瞬間、エリナの身体は思考を挟むより早く、条件反射的に反応した。

きゅんっ。

下腹部の奥にある「聖杯体」が疼き、太ももの内側がじわりと熱を持つ。

悪夢の中で引き攣っていた彼女の子宮が、今は全く別の飢餓感に支配されている。

長時間の睡眠によって、あの太く熱いプラグから解放されていた秘裂の窄まりが微熱を帯び、ぽっかりと空いたままの空虚感に耐えかねて、きゅうっと切なく収縮する。

シーツに甘い匂いの蜜が滲んだ。

仕事だ。

それは彼女にとって労働の義務ではない。

クロノス社の無慈悲な査定システムは、コンマ数秒の反応の遅れすら劣化と切り捨てる。

もしそうなれば、私は二度とこの足で歩けなくなる。

意識を薬物でドロドロに溶かされ、ガラスのカプセルに沈められ、ただ機械に性エネルギーを貪られるだけの物言わぬ人形にされるのだ。

背筋を駆け抜けたその恐怖が、下腹部の疼きをさらに鋭く、狂おしいものに変えていく。

あのスラムの泥濘に二度と戻らないために、私はマザーの完璧な部品で在り続けなければならない。

「はい、マザー。……すぐに、行きます」

エリナは上気した顔でベッドから飛び起きると、何も身につけず全裸のまま部屋を飛び出した。

早くあの整備ドックへ行き、無骨な『EVAハーネス Mk.5』の生体接続フレームに全裸を縛り付けられたい。

そして、マザーから伸びるあの冷たくて太い接続プラグを自分の奥深くまで挿入され、神経を狂わせる電流と愛液で頭の中を白く染め上げてもらわなければ。

脳が、子宮が、その暴力的なまでの接続を求めて、きゅんきゅんと悲鳴を上げていた。

無機質で清潔な廊下を、裸足で駆ける。

自由なんていない。

人権なんて何の価値もない。

この温かい場所にいられるなら、私は喜んで狂った機械の歩く部品になる。

2. 深淵の覗き窓

居住区から整備ドックへ向かう通路の途中に、分厚い防爆ガラスで仕切られた区画がある。

『炉心区画（メイン・リアクター）』。

この巨大な宇宙船を動かす莫大なエネルギーを生み出し続ける、船の心臓部だ。

エリナは足を止め、ガラス越しにその光景を見下ろした。

薄暗い空間に、巨大な円筒形カプセルが6基、静かに並んでいる。

その中には、保存液に満たされ、浮遊する裸の女性たちがいた。

彼女たちに名前はない。

ただの炉心ユニット1番～6番だ。

手足は頑強な金属製拘束具でカプセル内壁に固定され、口には太い呼吸用チューブが深々とねじ込まれ、喉の奥まで塞いでいる。

彼女たちの股間を貫いているのは、人体に合わせて設計された医療用プラグなどではない。

無骨で凶悪な、黒光りする工業用ピストンだ。

大人の腕ほどもある太さの鋼鉄の杭が、未発達な膣口を裂けんばかりに押し広げ、子宮頸部にある「聖杯体」を無慈悲に打ち据えている。

さらにアナルには、排泄物を吸い出しながら腸壁を掻き回す、スクリー状の太い管がねじ込まれていた。

ギュルル……ゴポッ……。

防爆ガラスを透過して、液体の中を伝わる重低音が微かにエリナの骨を揺らす。

スクリーが絶え間なく回転し、汚物と腸液を強制的に汲み上げる。

口枷の隙間から大量の気泡が漏れ、彼女たちの白目を剥いた顔が苦悶と快楽に歪む。

膣を貫くピストンが機械的な正確さでガシャン、ガシャンと往復し、無残に開発され尽くした子宮口を容赦なく打ち据えるたび、腹部が内側から突き上げられたように大きく波打った。

それは性行為ではない。

「掘削」だ。

彼女たちの聖杯体という鉱脈から、巨大船のすべての推進力と演算システムを駆動するための高次元生体波「オルガパルス」を根こそぎ採掘する、冷徹な工業プロセス。

カプセルの上部に這う太い真鍮製のエネルギー抽出管が、彼女たちの高熱を帯びた生体熱で生き物のように細かく震えていた。

抽出されたばかりの、男が浴びれば中枢神経を焼かれて即死するほどの超高濃度オルガパルスが、薄暗いリアクター室の天井を、粘り気のある毒々しい桃色の蛍光で明滅させている。

その淫らな光が、白目を剥いて悶える彼女たちの濡れた肉体を、狂おしく浮かび上がらせていた。

人間としての尊厳など欠片もない。

ただ死ぬまで快感と排泄を管理され、意識が焼き切れるほどの絶頂を強制され続けるだけの、生きた発電機。

だが、エリナの視線は、中央に鎮座する『1番ソケット』に釘付けになる。

2番から5番までのカプセルが、システム規格通りの澄み切った淡い青色（Type Azure）の冷却液で満たされ、夢見る人魚のように静かにベース電力を発電しているのに対し、この1番の様子はすでに異様だった。

長年の過酷な稼働によって搾り取られた愛液と白濁液が充満し、カプセル内は完全に乳白色に濁りきっている。

巨大なピストンが激しく往復するたび、粘性の高い濁液が攪拌され、白い闇の合間から変わり果てた姿がピンク色の肉肉しい断片として朧げに覗く。

かつて自分を救って身代わりに炉心へ堕ちた指導役、アリス先輩だった。

(.....先輩。今日も奥まで、たっぷりお仕事してますね)

度重なる強制絶頂でマシュマロのように弛緩しきった肉体。

だらしなく泡を吐き出しながら痙攣する恩人の姿に、エリナはガラスに手を当てた。

スラムの泥沼で泣いていた私に、甘いチョコをくれた匂い。

頭を撫でてくれた、生身の手の温かさ。

あの気高かった先輩はもういない。

ただの精巧なオモチャとして、惨めに開発され尽くした雌の穴があるだけだ。

胸の奥をチクリと刺す微かな罪悪感は、私が彼女を見下ろしているという底知れない歪んだ優越感によって、ねっとりと圧殺されていく。

彼女たちは外れを引いたのだ。

何の取り柄もないから、こうして閉じ込められ、機械に犯され続けるしかない。

でも、私は違う。

私には技術がある。

手先が器用でマザーの言葉を理解し、何よりこの無骨な『EVAハーネス Mk.5』の神経フィードバック機構によって、オルガパルスを安全に逆流・制御できる適性を持っている。

だからこうして歩くことが許され、選ばれた部品としてのご褒美を与えられているのだ。

そして、エリナの視線は一番手前へと移る。

『6番ソケット』。

そこは乳白色すら通り越した、さらに凄惨で異常な色彩を放っていた。

どす黒く濁った、沸騰する赤褐色の液体（Type Crimson）。

休むことなく強制絶頂パージを繰り返させられた末に、分泌されるバイオ・クーラントが自家中毒を起こし、劣化した樹脂や少女自身の血、排泄物と混ざり合って無残に変色しているのだ。

生命維持の限界を告げる、毒々しい赤色のエラーランプが明滅している。

それでも、中央に突き刺さった黒光りする極太の工業用ピストンは、コンマ数秒の狂いもなく無慈悲な往復運動を続けていた。

ガシャン、ガシャン……ッ！

ガラス越しに微かに伝わる、鈍い水音。

ピストンの暴力的な質量に挟られるたび、その「前任者」はビクン、ビクンと無機質に腰を跳ね上げる。

光を失った瞳は虚空を見つめ、だらしなく開いた口からは細い泡しか出ない。

生命の限界すらとうに超えているのに、その中心にある「雌の穴」だけが機械にねじ伏せられ、狂ったように弱い痙攣を刻み続けた。

視界の隅に浮かぶデメテル号の運行ログには、無慈悲なシステムフォントで次の予定が明滅していた。

【アイギス・プライム減速シークエンス突入まで：残り12時間】

【ポートタスク：機能不全（デッドリンク）の6番ソケットの排出（ページ）、および新規アセットの充填】

（……あと、12時間）

12時間後には自動的に減速の逆噴射が始まり、船体は凄まじい高負荷に晒される。

そして港に着いた時には、あの限界を迎えた「前任者」が排出され、代わりに新たな無知な新人が、あの極太のピストンに悲鳴を上げながら串刺しにされるのだ。

もしこのポート前最後の応急修理で、私が反応速度をコンマ数秒でも遅らせれば。

私があの赤褐色の濁りの中に押し込まれ、意思を失ってなお、あんな風にイカされ続けながら壊されていくのだ。

想像した瞬間、首に嵌められた重苦しいネックカラーの冷たさが、背筋を凍らせるような幻痛となって全身を駆け抜けた。

「ひっ……！ あ、あぐっ……！？」

死の恐怖。

肉体が強張り、心拍数が跳ね上がる。

だが、その強烈な生存本能の悲鳴を、首輪のセンサー（マザー）は冷酷に「強度の発情シグナル」として処理した。

心理的安定バッファの強制介入。

ズンッ、と下腹部の奥にある「聖杯体」が狂ったように疼き、太ももの内側をねっとりとした熱い蜜が伝い落ちる。

「あ……っ、ちが、私、は……あんなの、嫌……っ」

防爆ガラスに手を突き、ガクガクと震える膝を必死に堪える。

怖い。

壊れるまで犯され続けるなんて絶対に嫌だ。

その凄絶な拒絶反応すらもが、子宮をきゅんきゅんと収縮させ、脳髓を焼くような甘い痺れへと強引に反転させられていく。

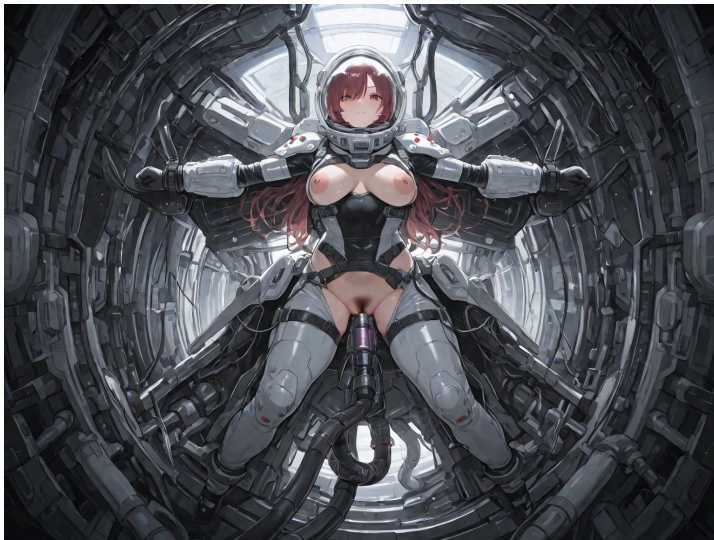
「あ.....ああんっ.....！ 私、は.....違うもんっ。マザーの、特別な、部品だもん.....っ♥」

私はあんな使い捨てじゃない。

早くあの熱いプラグでお腹を満たして、選ばれた存在だと証明しなければ。

赤褐色の液体の中で弱い痙攣を続ける「肉」に背を向けると、エリナは退廃的な熱に浮かされた足取りで、整備ドックへと急いだ。

OMS(オルガ・メンテナンス・システム)



無人宇宙船および自動ステーションにおいて、AIでは対応困難な物理的作業を補完するために導入された生体統合システム。

搭載される女性ユニットは「人間」ではなく、「生体アクチュエーター兼・補助発電機」として扱われる。

通称：**OMG(Orga Mobile Generator)**

平時は船壁の収容区画に固定され、半覚醒状態で眠りながら、接続されたプラグを通じて基礎電力を供給し続ける。

異常発生時や作業指令が出されると強制的に覚醒させられ、船内外の修理・整備を行いながら、性的刺激によってオルガパルスを生成し、船の電力を補填する。

労働負荷がそのまま発電出力に直結する設計のため、作業中も接続を解除されることはない。

稼働不能と判定されたユニットは、速やかに固定式の炉心ソケットへ再配置される。

3.出勤の儀式

整備ドックの空気は、ひんやりと研ぎ澄まされている。

エリナは中央の装着台に立つと、慣れた仕草で四肢を広げた。

頭上から複数のアームが伸びてくる。

ガシャン、ガシャンという重厚なロック音と共に、彼女の両腕と両脚は、旧世代の汎用重装型である『EVAハーネス Mk.5』に拘束された。

無骨な鋼鉄のガントレットとブーツ。

デブリや作業事故から機能部品を守るための、頼もしい物理装甲だ。

しかしその瞬間、ハーネスの強力な油圧アームが唸りを上げ、エリナの手首と太ももを左右にグイッと容赦なく引っ張り上げた。

意思とは無関係に、股間がもっとも無防備に開帳された屈辱的な姿勢のまま、頑強にロックされる。

重苦しい金属ネックカラーから股間にかけての柔らかな胴体には、装甲はおろかインナースーツすら存在しない。

完全に全裸のまま、生体接続フレームに緊縛され晒されている。

守るべき四肢の無骨な装甲と、無防備に晒すべき胴体の全裸。

この極めて歪でアンバランスな仕様により、逃げ場を完全に奪われた無力感が、エリナの被虐心を心地よく刺激する。

『コーティング開始。.....じっとしててくださいね』

プシュウ.....という音と共に、ノズルから透明な霧が噴き出した。
「薄膜ナノシエルコート」の形成剤だ。

ひやりとした冷たく粘度の高いジェル状の霧が、乳房の膨らみや窪んだお臍、そして秘裂のひだに至るまで、全裸の胴体を極薄の膜で覆っていく。

この廉価版の皮膜は、真空での血液沸騰こそ防ぐが、宇宙の極寒や熱線を完全に遮断することはしない。

生の宇宙を、物理的防護のない肌で直接感じさせるための仕様だ。

『接続（コネクト）』

仕上げの儀式。

まずは極小のアームが床下から伸び、無防備に開かれた彼女の秘裂の最上部へと狙いを定めた。

そこにあるのは無機質な皮膚の埋め込み端子などではない。

最もデリケートな性感帯であるクリトリスを貫通し、普段から彼女の感度を際限なく増幅させている銀色のリングピアスだ。

極小の接続コネクタが、そのピアスにカチリと正確にドッキングする。

先遣接続だ。

「ひゃうッ……っ♥」

接続された瞬間、ピアスに仕込まれたマイクロ電極からクリトリスの神経節へ直接、微弱な催淫パルスが放たれる。

ビクウッと背中を跳ねさせたエリナの網膜に直接、無機質なシステムUIが投影された。

心拍数、体温、血圧。

そして何より、彼女の子宮がどれほど熱を持ち、マザーのプラグを求めて脈打っているかを示す発情度が、毒々しい赤い波形となって視覚化される。

だが、今日の要求パラメーターは異常だった。

平時の安全域を大きく逸脱し、肉体の限界を示すレッドゾーンにまで規定値が引き上げられている。

船全体のエネルギーが極度に不足しているのだ。

しかし、思考を狂信で満たされたエリナは、それを「今日はいつも以上にマザーが私を激しく求めている」という甘美な要求として受け取った。

自らの最も敏感な急所を機械に掌握され、異常な発情すら数値として暴かれている恥辱。

『バイタル同期完了』

明滅する文字が、彼女の精神的な屈服を深めていく。

呼吸も脈拍も、もう自分のものではない。

そして、床下から太い黒色のメインケーブルが鎌首をもたげ、強制的に開帳されたままの無防備な股間へと伸びる。

エリナは期待に瞳を潤ませ、わずかに腰を浮かせた。

先端についた硬質で冷たいプラグが、愛液でぐしょ濡れになった窄まりを押し広げ、体内の深淵へと侵入してくる。

今日のマザーは、激しく飢えている。

いつもならゆっくりと馴染ませるように入ってくるプラグが、今日はいきなり最奥まで突き進み、子宮口の聖杯体にガチリと凶悪な力で噛み合った。

「あ……っ！？ん、うう、ああ……ッ♥」

暴力的なまでの侵入。

異物が内臓を限界まで押し上げる強烈な圧迫感は、直結したシステムからの神経ハックによって、一瞬にして脳を焼くような甘い痺れへと反転していく。

あの炉心区画で見た、肉を破壊する狂ったピストンとは違う。

彼女のためだけに調整された、とろけるような充足感。

続いて背後からもアナルプラグがねじ込まれ、彼女の下腹部は二本の太い杭によって完全に満たされた。

「はぁ……っ、お腹、いっぱい……っ、マザーのプラグが、私のぜんぶを、埋めてる……う♥」

冷たい鋼鉄の体積が子宮を内側から押し広げ、激しい神経パルスが全身の血管を駆け巡る。

液体の補給ではなく、純粹な支配と接続による電氣的な飽和感が、彼女の飢えていた肉体を暴力的に満たしていく。

苦痛はない。

あるのは、自分がマザーと繋がったという圧倒的な安心感だけだ。

このプラグを通して、私の生体エネルギーが船へと流れ込み、代わりにマザーからの快感が流れ込んでくる。

『バイタル良好。発情レベル、規定値へ上昇。これより気密シールドを展開します』



重々しい電子音と共に、頭上から球体の気密ヘルメットが降りてきた。

ガツンと首元の金属ネックカラーにヘルメットの底部が噛み合い、強固に密閉・加圧される。

同時に、ヘルメット内部から伸びた柔軟なシリコン製のバイトブロックが、エリナの開いた唇を容赦なくこじ開けて口内に侵入した。

舌を強制的に押し下げ、咽頭の奥まで塞ぐように固定される。

唾液を飲み込むことすら機械の嚥下アシストに頼らざるを得ない、徹底的な肉体支配。

「んむ……ッ、は一……っ、ふう……ッ♥」

生ぬるい酸素が肺へ直接送り込まれる。

口腔を完全に塞がれたことで、彼女の喘ぎ声はくぐもった鼻呼吸の音に限定され、ヘルメットの気密空間の中にだけ閉じ込められる。

これ以降、彼女の声は骨伝導マイクを介した単なる数値データとしてしかマザーに届かない。

言葉という人間性を完全に奪われ、発情も呼吸も管理される一基の生体端末。

その事実が、脳を焼くような甘い安心感となって彼女を満たしていく。

完全な、歩く機械部品の完成だった。

『今日もいい感度ですね、エリナ。骨盤の収縮波も極めて安定しています。……不足したパルスを、たっぷり補ってくださいね』

「んあ……っ、ああー……♥」

マスクの奥で竦った声を弾ませるエリナに、マザーの声が脳幹に直接響く。

だが、その完璧な人工音声の奥で、粘り気のある水音が不気味に蠢いた。

まるで極度の飢餓状態にある獣が、喉を鳴らして涎を嘍り上げているような、生理的なノイズ。

『ふふ、焦らないで。いいお仕事をすれば、作業後にカプセルで、あの甘くて重たいご褒美をたくさんお腹に注いであげますからね。.....行っってらっしゃい、私の可愛い指先』

エアロックのインジケーターが赤から青へ変わる。

プシューッという激しい減圧音と共に外扉が開き、エリナは鋼鉄の手足を駆動させ、恍惚の表情で空気のない、暗黒の真空の海へと躍り出た。

作品名: 星海の修繕士～蜜の報酬～

発行日: 2026年8月14日

発行者: XYZ_L

連絡先: <https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード（SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む）を固く禁じます。
